

## 論文審査の結果の要旨

### 論文題名

近世関東新義真言宗教団の基礎構造

### 論文審査の要旨

本論文は、現在東京都あきる野市にある新義真言宗の寺院・大悲願寺を田舎本寺（地方における本寺、大悲願寺には 30 強の末寺・門徒寺〈末寺のさらにひとつ下の格の寺院〉があったという）とした一地方教団を事例に、地域における宗教・寺院のあり様を究明した研究である。具体的には、大悲願寺がその末寺や門徒寺といかなる関係を結んでいたのか、また大悲願寺門末は拠点としていた地域の民衆・村落とどのように関わっていたのかといった点を、おもに近世中期から後期を対象にして、詳細に明らかにしている。

近年、日本近世宗教史研究は活況を呈している。その中で、地域社会における宗教の位置づけ、宗教にとっての地域社会との関わり方を追究することの必要性が重要な課題のひとつとされ、朴澤直秀『幕藩権力と寺檀制度』（吉川弘文館、2004 年）、『近世仏教の制度と情報』（吉川弘文館、2015 年）、澤博勝『近世の宗教組織と地域社会』（吉川弘文館、1999 年）、『近世宗教社会論』（吉川弘文館、2008 年）、村上直編『近世高尾山史の研究』（名著出版社、1998 年）などの成果があげられている。

これに対して、日暮氏は、大悲願寺文書（古文書だけで 1 万点、典籍なども含むと 2 万点にも及ぶという）や清勝寺文書などの寺院文書のみならず、大福家文書など村方文書も含む貴重でまとまった一次史料群を博搜し、それらに丁寧に向き合うことで、関東の一地域の新義真言宗教団を対象に、先行研究と比して、より地域に密着したかたちで上記の課題を具体的に解明している。

以下、簡単にではあるが、各部・各章の内容を紹介する。

まず、序で研究史整理や課題設定を行い、とくに「現場の寺院や僧侶の実際の姿」（1 頁）に関する研究が不足していることを強調する。そのうえで、第 I 部「近世関東新義真言宗寺院組織の基礎構造」では、教団や所属する僧侶の基本的なあり方を解明する。

第 1 章「新義真言宗田舎本寺大悲願寺とその門末の具体像」は、大悲願寺とその門末寺院などの数や経営状況、僧侶の出身地や移転の事例など、大悲願寺とその門末寺院に関する基礎的な事実関係を明らかにしている。本論文の前提となる部分である。

第 2 章「葬祭と近世の寺院」は、大悲願寺における葬式の事例や戒名のつけ方、年中行事や

布施収入の実態などを究明し、大悲願寺が檀家や地域からの要求にいかなる対応をとっていたのかを明らかにする。「檀家の要求に対して村落秩序へ配慮しながら対応してゆかなければならず、それを怠ると帰依を失う可能性」があったことなどを指摘、そのような大悲願寺のあり様は、「いくつかの先行研究で述べられる」「強権的な寺院像とは異なる姿」と論じる（以上、56頁）。

第3章「田舎本寺西勝院と末寺・門徒の具体像」では、埼玉郡八条村の小本寺＝「田舎本寺（中本寺）の配下にありながら、自身も配下の末寺や門徒を抱えている寺院」（63頁）である西勝院とその門末の基礎的な事実関係を概観したのち、末寺の住持に関する人事の具体相を究明する。本論文中で挙げられる事例では、住持の人事について、檀家の要望が一定程度考慮されていたこと、また寺院の財産を檀家が管理する事例もあったことなどを指摘、とくに檀家の力なしには運営が行いがたいような寺院の場合、「檀家らの寺院に対する意識が強まることもあったのではなからうか」（77頁）などと展望する。

第Ⅱ部「近世関東真言宗寺院と檀家・村落」では、それらを前提にして、教団と地域・檀家との関係を描く。

第1章「寺檀関係再考」は、大悲願寺末寺成就院と村方の争い（百姓直右衛門に対して院号居士の戒名を授けたことや門牌を建てたことなどが問題となった）や石工差別を背景とした石山利用をめぐる大悲願寺住持慈明と名主孫左衛門が対立した一件などの経過を明らかにし、一部の檀家から離檀を申し入れられたことなどを契機として、慈明が隠居するに至ったことなどを指摘する。「村の慣習や自分たちの要求などを配慮しない住持」（108頁）に対して、離檀や不帰依で対抗する檀家の姿などが明示されるが、その背景として、大悲願寺門末の「後ろ盾となる権威・権力」（109頁）の不在や経営基盤の脆弱さを指摘する。本論文の中核をなす章といえよう。

補論「大悲願寺門末の不帰依・離檀事例」は、大悲願寺文書から確認しうる離檀・不帰依の事例7件のうち、第1章で扱った4例以外の3例について、その概要を示す。

第2章「末寺昇格事例に見る僧侶・檀家・寺院」では、大悲願寺門徒寺院の末寺昇格に関して、そのあり様を究明し、寺院と檀家の関係を問う。具体的には、天明期の6ヶ寺昇格を分析、昇格の契機には、檀家の希望の場合も、住持のその場合もあったこと、認可に際しては、厳しい審査などは行われず、本寺・当該門徒寺院・檀家それぞれに、経済上や格式上の相応のメリットがあったことなどを指摘する。

第3章「村の寺から教団の寺」は、房総地域を舞台に、「特定の教団に所属していなかった村の寺院が、真言律宗に加わることにより、教団所属としての寺院へと変化してゆく様子を紹介」（142頁）する。無住でどこの本寺にも属していなかった不動堂が、真言律宗霊雲寺を本寺にする過程（寺名も霊光寺と改める）、「周辺寺院との関係から」檀家を持たない「無檀家の領主祈祷寺として存立」（157頁）せざるをえなかった背景などを具体的に明らかにする。そのうえで、村方との争いの具体相などを究明し、時に村方と利害を対立させることもあったことなどを論じる。

最後の結では、本論文第Ⅰ部・第Ⅱ部の各章で明らかにした上記のような点をまとめ、大悲願寺門末においては、先行研究でまま強調される寺院側から種々の強制を受ける檀家の姿はあ

まり確認できず、むしろ菩提寺の寺格の向上を願い積極的に行動する檀家の様子が窺えること、村や檀家と争論になった際、訴訟費の問題などもあり、村や檀家側にさまざまな譲歩をする寺院・僧侶の動向が検出できることなどを論じる。そのうえで、寺院（とくに大多数であった門徒寺）・僧侶に対する檀家の意識をよりいっそう明らかにしていく必要があることなどを指摘する。

以上のように、本論文においては、布施収入の比率の小ささといった寺院経営の実相と特徴、みずからに不利益をもたらすような事案の際には不帰依・離檀などを通じて寺院に対抗する民衆の姿、山林の諸権利を通じて村方などと争う寺院の動向、僧侶の移動の多様性などのほか、自らの地位を高めようとする村方における新興層の家の動きと寺院の関係性などが具体的に究明されている。

最初に述べたとおり、近年、日本近世宗教史研究では、宗教と地域社会の関係に関する研究の必要性が強調されているが、本論文はまさに、大悲願寺門末の地域におけるあり様を、一次史料から具体的に明らかにした実証的な研究である。巻末に付された多くの表も一次史料から作成された労作で、僧侶・檀家の数の変化や寺院の経営状況など、基礎的で重要な情報を大量に含んでいる。そうじて、上記の課題に対して、真摯に向き合った研究といえ、学術上の意義は高い。

もちろん、いくつかの問題も含んでおり、論文審査担当者から種々の指摘がなされた。具体的にいえば、研究史整理や結の部分のまとめ方、論文の構成、一部史料の解釈（より逐語訳的で精緻な読みが要される）などに関してであり、それらについては改善の余地が残る。しかし、全体として見れば、本論文が新義真言宗の地方教団を事例に、それまで十分に解明されていなかった「現場の寺院や僧侶の実際の姿」（1頁）を地域社会との関係性も含めてより具体的に明らかにし、日本近世仏教史研究・宗教史研究（あるいは地域史研究）にあらたな蓄積をもたらしたのは確かである。

論文審査担当者3名は全員一致で、日暮義晃氏の当該学位請求論文には、上記のような学術的価値があることを認め、博士（史学）の学位を授与するのにふさわしい研究であると判断した。

論文審査主査	佐藤 雄介	准教授
	千葉 功	教授
	高埜 利彦	特別非常勤講師
		(学習院大学名誉教授)